

主 題：神の栄光のために 1**聖書箇所：ローマ人への手紙 15章1-6節**

今日はローマ人への手紙15章1節からです。

パウロはこれまで、ローマの教会に存在した争い、信仰の強い人と信仰の弱い人の争い、そのようなことが早く解消するように、教会が一つになるようにと、そのことを願ってのみことばを記しています。非常に大切なことをパウロは教えようとしたのです。そのことを私たちはこのパウロの手紙から学んでいきます。この15章に入ってもパウロは、教会の中に存在したそのような問題を覚えて、教会が一つになるようにという勧めを為すのです。

15章1, 2節には、特に、教会の中で信仰の強い者たちに対する勧告といえる厳しい勧めがなされています。そして、3, 4節を見ると今度は、その勧告を与えた理由について言及しています。そして、最後に5, 6節を見るとパウロは、彼自身の教会に対する祈りを記しています。まさにこの祈りは、ローマ教会だけではなくて、すべての歴史上の教会に必要であり、また、大切な祈りであることを私たちはのみことばを見ることによって確信します。ぜひ、1節からご覧ください。

☆神の栄光のために**1. 信仰の強い者への勧告 1-2節**

1節に「**私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。**」と、まず、パウロはここで「**私たち**」と一人称の複数形を使います。「私」ではありません。というのは、この勧告の中に彼自身が含まれているからです。ローマの教会の信仰的に強い者たちだけでなく、実は、私もこのレッスンを学ばなければいけないとパウロは言わんとするのです。そこで「**私たち力のある者は**」と言います。「**力のある者**」とはだれでしょう？思い出してください。神の教えをよく理解している人たちのことです。理解するだけでなく、彼ら自身が神のみことばに従って生きている者たちです。だから、「**力のある者**」、信仰の強い者です。なぜなら、神がその人たちのうちに働いておられるからです。

エペソ人への手紙でパウロは教会についてこのように教えています。皆さんは良くご存じの箇所ですから聞いていてください。エペソ人への手紙4章では、神は教会の中に様々な働き人をお立てになつたと記しています。

成長の過程：エペソ4：11「**こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになつたのです。**」。今の教会を見る時に、神はそのように特別な働き人を教会にお立てになります。何のために立てられたのか？みことばが教えることは12節「**それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、**」と、つまり、牧師たちの責任は、神のおことばを正確に語ることです。神のみこころを明確に示すことです。神が望んでおられることがいったい何なのか、神が与えてくださったこの聖書という書物が、私たちに教える神のみこころが何かを明確に伝えることです。そして、そのみことばを聞いた皆さんが、それによって成長し、そして、彼らがキリストに似た者へと変えられていくためです。みことばはこのように続きます。13-15節「**ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。：14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、：15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。**」。この箇所が私たちに教えていることは、みことばを聞いた一人ひとりがそのみことばを実践することによって信仰が成長して行くということです。

成長の結果：今読んだ14節には、信仰において成長した人のその特徴と言えることが記されています。信仰が成長している人、信仰的におとなの人、霊的におとなである人に言えることは、いろいろな間違った教えに決して惑わされないということです。いろんな教えが入って来ても「それは聖書的でない」と判断できる人です。同時に、日々起こる様々な試練の中で、動じることがない、信仰が揺るがない、安定した堅実な信仰の歩みをしている、そのような人のことです。

このように、信仰的に強い人たち、信仰的に成長している人たち、「その人たちは…」とパウロは言うのです。もう一度15：1を見て「**べきです**」ということばに気付かれませんか？日本語の聖書にはこのことばが繰り返して使われています。1節「**になうべきです。**」「**自分を喜ばせるべきではありません。**」、2節「**その人の益となるようにすべきです。**」と。実は、このことばはすでにローマ13：8で

見ました。そこではこのように訳されていました。「何の借りもあってはいけません。」と。ここでは「借り」という意味で訳されていました。「借金、借金を負っている」という意味だと私たちはすでに学びました。そこで、パウロがこの15章で言わんとしていることは、信仰の強い人たちには負うべき義務があるということです。何か借りたなら返さなければいけないという義務があるように、パウロはこの15章の1節でも、2節でも、信仰の強いあなたにはこのような義務があるということを言っているのです。どうしてもしなければいけないことが二つあると言うのです。

◎信仰者にとって「どうしてもしなければならぬこと」

1) 弱い人を助ける 1 a 節

パウロが望んだことは、信仰において成長している者たちが、そうでない人々、信仰において弱い者たち、力のない者たちをさばくのではなくて、彼らを助けてあげることです。ですから、パウロは1節の初めに「力のない人たちの弱さをになうべきです。」と言ったのです。

◎「弱さをになう」：彼らの成長のために助けを与える

「になう」ということばは新約聖書の中に25回以上出て来ます。「水瓶や棺など、いろいろなものを運ぶ」と訳されることばです。弱い人たちの弱さを運んであげなさい、つまり、助けるということです。繰り返しますが、皆さんに覚えていただきたいことは、ローマの教会の中には残念ながら、そのようなことは行なわれていなかったのです。互いにさばき合ったり、いろんな争いがあったのです。そして、これはローマの教会だけでなく、人が集まるところに共通した問題です。必ず、そこには様々な問題、争いが出て来るのです。そこでパウロが言うことは、聖書ではなく、あなたの人間的な考えや、あなたの思いを押し付けたり、批判的であったりさばき合ったりするようなことがあってはならないということです。確かに、あなたと違う考えをもっている人がいます。ローマの教会にもそのようなことがありました。食べ物に関すること、飲み物に関すること、特別な日に関していろんな考えがあったのです。しかし、そのどれもが聖書がしてはならない、しても良いと定めているものではなかったのです。個人的な考えでそのような意見の違いが生じていたのです。だからパウロは、異なった考えをもっている人たちの意見を聞いて、彼らの行ないを尊敬をもって受け入れて、そして、彼らの成長のために助けを為していきなさいと言いました。パウロはそのことをこの15章の最初に言うのです。

また、この「になう」ということばは、実は、ガラテヤ人への手紙6章にも出て来ます。6：2には「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。」とあります。助け合うことです。「重荷」とは何でしょう？私たちが経験する手に負えないような困難、問題です。そのようなものを助け合いながら担いでいきなさいと言うのです。そしてパウロは「そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。」と言います。自分と考えが違うからといってその人たちをさばいたり、彼らのことを批判することは、実は、キリストの律法を全うしていないのです。何のことでしょう？「キリストの律法を全うする」ということはキリストが示してくださった愛を示すことです。私たちがこの地上にあって、主イエス・キリストが私たちに示してくださった愛を示していくことです。ですから「互いの重荷を負い合う」ということは「愛の実践」なのです。そのようなことが為されていなかったこのローマの教会の兄弟姉妹に対してパウロがこのように厳しく言ったわけは、そこに大きな問題があることを知っていたからです。つまり、愛の欠如です。

信仰者の皆さん、私たちは思い出さなければいけません。私たちはどうすることもできない罪の重荷を負って生きていたのです。イエスは何と言われましたか？「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ11：28)。そして、私たちはその方の前に行き行って、私たちの重荷をイエスの上に委ねたわけです。そして、彼がその重荷から、その罪から私たちを救い出してくださったのです。私たちの周りを見たときに、救われているクリスチャンの中にもいろんな重荷を負っている人がいます。「彼らの信仰がもう少し成長すれば…」ではなくて、彼らを助けてあげなさいと言うのです。彼らを愛して、彼らと時間を取って、彼らを励ましてあげなさいと。それこそまさにキリストの律法を全うすること、神の愛を示して行くことだと言うのです。弱い人をさばくのではなくて彼らを助けてあげなさい、そのようにしてあなたがいただいた神からの愛を示してあげなさいとパウロは勧めるのです。

2) 弱い人に仕える 1 b-2 節

1節の後半から2節に「自分を喜ばせるべきではありません。：2 私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」とあります。自分のことよりも周りの人のことを考えなさい、彼らを喜ばせることを優先しなさいと言うのです。もちろん、これは皆さんもお分かりのように、彼らの機嫌を取りなさい、彼らの喜ぶことをして彼らが機嫌を良くすると、そのようなことではな

いことはこのみことばを見ると明らかです。確かに、このような命令を私たちはパウロから受けるのですが、私たち信仰者の一番の責任は、人を喜ばせる以上にだれを喜ばせることですか？だれに一番喜んでいただきたいですか？神です。我々の主に喜んでいただきたい、それが私たちの一番の願いです。そのような願いをもって私たちは生きています。パウロはそのことをこのローマ書の初めから、私たちに繰り返し教えてくれているのです。しかも、この喜ばせるということは罪と全く無関係のものであると教えています。2節の後半に「その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」とあります。ですから、彼らを喜ばせることによって、彼らの信仰が成長して行く、それが目的なのです。ですから、罪のことではないことは明らかです。彼らの信仰が成長するために私たちは為すべきだと言います。

どのようにしてそのことを為すのか？三つのことが記されています。二つは今までに見たことです。

◎どのようにして弱い人の信仰の成長を助けるのか？

a) 彼らのつまずきになることをしない

つまずきを与えないことによって彼らは喜ぶのです。つまずきを経験することによって彼らは苦しみます。ですから、私たちが彼らを喜ばせるのなら、つまずきを与えないこと、つまずきとなることをしないことです。

b) 彼らの良心が傷むことを強要しない

「私は神のためにこの日を守るのだ」と言っている人に「それはおかしい、そんなことはしなくてもいい。」と言うなら、その人は頭では分かるかもしれないけれど、神を喜ばせると信じてやって来たことを「しなくてもいい」と言われるなら、当然、抵抗を覚えます。ですから、そのようなことを強要することによって、それが彼らの良心を苦しめることになるのです。まさに、このようなことは愛のない行為です。自分のことしか考えていないのです。「私はこれが正しいと思うからあなたもそのようにしなさい」というのは、その人に対して配慮に欠けた行為です。先ほどから見ているように、それは愛の行為ではないのです。ですから、パウロが言いたいことは、確かに、あなたは信仰において成長している、そして、あなたの周りを見ると、信仰的に弱い人がまだたくさんいるけれど、彼らをさばいたり、いろいろなことを一方的に命じたりするのではなくて、あなたは却って彼らに仕えていきなさいということです。皆さん、私たち信仰者に必要なことは「へりくだること」です。人が集まったときにそこに一致が生まれるその鍵は、あなたがへりくだることです。私がへりくだることです。パウロはピリピ人への手紙2：2-4でこのように言っています。「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」と、ここに一致が生まれる鍵があるのです。私たちの問題は「私たちのプライド」です。しかし、神が望んでおられるのはこのようなへりくだりです。

c) 彼らの信仰の成長と強化に努める

弱い人を助けてあげなさい、さばくのではなくて、弱い人に仕えていきなさいと言いました。パウロがローマの教会に宛てたこの教え、私たちの今のこの社会の、この日本の、この私たちの教会を考えるときに、同じような問題があります。私たちの間でも「クリスチャンはこうするべきだ、こうあるべきだ。」、また「教会はこうあるべき、集会はこうあるべきだ。」と、そのような人間的な考えをあたかも神の教えであるかのように信じている人たちがいます。例えば、祈禱会はこのようにするべきだとか、祈禱会は何回するべきだ、何時からするべきだと言います。私たちが考えなければいけないことは、果して、本当に聖書がそのように教えているのかどうかです。今極端な例をあげましたが、皆さんには今話したことは分かっていただけだと思います。聖書が教えていないこと、私たちが育ってきた環境や自分が通っていた教会など、いろいろなところから私たちは「これが正しい」、「これが聖書的だ」と信じ込んでいることがあるのです。私たちがしなければいけないことは、それが本当に聖書が教えていることかどうかということに戻っていくことです。そうでなければ私たちは信仰生活の中でずっと教えられて来たことが聖書の教えることだと信じ込んで、それを人に強要してしまうことがあるからです。そうするなら、ローマ教会が直面していたような様々な問題に陥っていくのです。

自分の考えを強要する、また、ときには公に批判することがあるかもしれません。そのような行為は信仰の弱い人を助けません。却ってその人たちのつまずきになります。まさに、私たちが見ているようなことがどの時代でもどの場所でも起こるのです。なぜ、そのようなことが起こるのでしょうか？一言だけ言って次に進んでいきますが、そのような問題が起こるのは、結局、私たちの信仰に関わっているのです。信仰が余りにも幼すぎるのです。なぜなら、私たちが学んで来たように、みことばが私たちに教えることは「何が神の前に正しくて、何が神を喜ばせるのかを考えて選択すること」です。ローマ書

12章でパウロはそのように教えています。私たちはそのように生きていくのです。私の言うことは、私の考えること、私の行なうことが神に喜ばれるのかどうかです。そして、それより一歩も二歩も踏み込んでパウロが教えてくれたことは、逆に、それが弱いクリスチャンたちのつまずきにならないかどうか、彼らの信仰の成長の妨げになっていないかどうか、そこまで配慮しなさいと言うのです。

なぜですか？愛するからです。信仰の弱い人たちの信仰の成長のために努めていきなさい、そして、あなた自身も「信仰が成長するには時間がかかる」ということを思い出すようにと言うのです。一瞬のうちに信仰の大人にはならないのです。忍耐をもって、愛をもって、信仰の弱い人たちと接していきなさいと言います。

もう一つ、今日から皆さんが実践できることがあります。パウロはエペソ書4章でこのように言います。信仰者のあるべき関係について教えたパウロは4：29で「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」と。このことが実践できたら私たちの周りは変わっていきます。「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。」と。正しいと思って言っていることもよく吟味してください。なぜ、それが必要ですか？私たちが何かを口にするときには、必ず、その背後に動機があります。なぜ、このことを言わんとしているのか？なぜ、このことをしようとしているのか？私たちは主に喜んでいただきたい、そのことを願いながらすべてのことをするのです。そして、私たちが人々と接するとき何を目指にして為すのか？みことばが教えたように「彼らの徳を養っていく」こと、彼らの信仰が成長すること、そのことを願ってすべてのことを為すのです。

ですから、このようにすることが出来ます。「神さま、どうぞ、今日から私のことばを私の態度を変えていってください。今日、私はいろんな信仰者に会うでしょう。でも、その時に私の語ることばや、私の為すことが彼らの信仰の成長になるように助けてください。そのように私を用いてください。」と、私たちはそのように祈りながら歩んで行くことができます。まさに、それこそみことばの実践です。

2. 勧告の理由 3-4節

さて、このように信仰の強い人に勧告を与えたパウロは、3節と4節を見ると、その理由について説明します。彼は二つの理由をここに上げています。

1) 主イエスの模範 3節

主イエス・キリストが実はそのように歩まれたと言います。イエス・キリストの模範をもって、特に、信仰の強い人たちにそのように生きなさいとパウロは勧めるのです。3節にこのように記されています。「キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、『あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にふりかかった。』と書いてあるとおりです。」と、この『』のところは詩篇69：9のみことばを引用しています。『あなたをそしる人々のそしりは、』と悲しい罪人の姿です。神に対する敵意のことです。神を非難するのです。その神に対する非難、神に対する敵意が、主イエス・キリストに向けられたと、このみことばは教えるのです。実際、この詩篇69：9のみことばをパウロがどうして引用したのか？実は、この箇所は主イエス・キリストの死を説明するためによく用いられているからです。ダグラス・モーという神学者は「ひょっとすると、このローマ教会において、信仰の弱い人たちは信仰の強い人たちからそしられていたのではないか。だから、パウロは敢えてこのみことばをここに引用したのではないか。」と言います。その可能性があります。いずれにしろ、私たちはイエス・キリストがどのように歩まれたのかということを見るときに、大切なことを教えられるのです。

なぜなら、イエスがこの地上におられたときに、イエスはある目的のために生きられたからです。その目的のためだけに生きられたと言ってもいいでしょう。それは「父なる神のみこころを行なうこと」です。それが主イエス・キリストの喜びでした。主イエス・キリストは父なる神のみこころを行なうこと、父なる神を喜ばせることが彼自身の喜びとして歩んで来られたのです。ですから、主はこの父なる神の栄光が現わされるため、また、益々この方が誉め称えられていくために自分の喜びを捨てたというのです。まさに、これはある目的のために自分を捨てた人の生き方です。自分のことなどどうでもいい、この目的さえ達することができたらと、イエスはそのようにして生きられたのです。

ですから、主ご自身がこのように言われています。ヨハネの福音書6：38「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。」と。また、ヨハネ8：28-29には「イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げてしまうと、その時、あなたがたは、わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。：29 わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行なうからで

す。」とあります。主ご自身の口から出たことばです。「わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行なうからです。」と、主イエスは父なる神のみこころに徹底的に従われたのです。100%従われたのです。私たちも自分のためではなくて、神が喜んでくださるそのために生きることが必要です。そして、その神が私たちに言うのです。「あなたの周りにいる信仰の弱い人たちを助けてあげなさい。彼らの信仰が成長して行くために彼らに仕えていきなさい。」と。そのことがこの教会の中で起こったら、どんなに主がお喜びになることでしょうか。周りの人々の信仰の成長のために仕えていこうとする、それが神が私たちに命じておられることです。「そのようにして生きなさい」と、神は私たちに教えておられるのです。主が喜んでくださるために。

2) みことばの教え 4節

このような勧告の理由として二つ目にパウロが教えることは4節です。実は、パウロが勧めたこの勧めは、神のみことばが私たちに教えることだと言うのです。4節「**昔書かれたものは、すべて私たちに教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。**」。

「昔書かれたもの」とは旧約聖書のことです。それは何のために書かれたのか？「教えるため」だと言います。何を教えてくれるのでしょうか？創造主なる神について教えてくれます。この方のみこころについて教えてくれます。神が何を望んでおられるのか？そして、この方によって造られた私たち被造物である人間が、どのような責任をこの神に対して負っているのか？聖書は私たちに私たちがどのように生きていくべきなのか、そのことを教えてくれます。パウロは1コリント10章でこのようなことを言います。イスラエルの先祖たちのことです。パウロはモーセの話をした後、6節に「**これらのことが起こったのは、…**」と言います。何が起こったのか？彼らの大部分は神のみこころにかなわず荒野で滅ぼされました。「**これらのことが起こったのは、私たちへの戒めのためです。**」と、モーセの時代のそのような出来事が聖書に記されているのは、新約の私たち「**私たちへの戒めのためです。**」と言うのです。「それは、彼らがむさぼったように私たちが悪をむさぼることのないためです。」と、私たちがどのように生きるのかを教えるために、実際に起こったモーセの時代のことが記されているとパウロは言うのです。7節にも「あなたがたは、彼らの中のある人たちにならって、偶像崇拜者となってはけません。」とあります。11節を見てください。「**これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。**」と書かれています。

ですから、こうして旧約聖書のみことばが私たちに与えられているのは、私たちに大切なことを教えるためです。我々が今どのように生きていくべきか、そのことを教えるためだと言うのです。ローマ書15章を見てください。確かに、私たちに教えるために、みことばは私たちに必要なことを教えてくれています。その目的が書かれています。4節の後半「**それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。**」と、聖書のみことばの目的は、このみことばによって私たちが希望を持つためです。私たち信仰者、この新約の時代に、恵みの時代に生きている私たちが、希望を持って今日生きていく、そのためにそれらのことが記されている、そして、このようなみことばを神は私たちに与えてくれたと言うのです。

4節にこの希望は「**忍耐と励ましによって**」与えられるものだと言います。どのようにして与えられるのでしょうか？

「**忍耐**」：歴史が証明したこと、神は約束を必ず守られる、約束を必ず成就されるという事実が私たちに忍耐をもたらすのです。なぜなら、旧約聖書の出来事を見たときに、確かに、神はご自身が言われたことを守られました。さばきが来ると言うときさばきがあったのです。救うと言うとき救われたのです。ききんが来ると言うときききんが来たのです。雨が降ると言うとき雨が降ったのです。私たちがそのことを見ることによって、確かに、神は約束されたことをその通りなさる方だ、それなら、主は必ず私たちに迎えに来てくださる、私たちをご自分のもとに召してくださる、我々はこの方とともに永遠を過ごすことができる、そのような約束に対して私たちは「まだ来てないけれど、まだ成就されていないけれども、必ず成就される、その時まで忍耐を持って生きていこう」と言います。忍耐を持って生きるのに十分な教えが聖書の中には記されています。

「**励まし**」：歴史が忍耐を持って生きることへの励ましを与えてくれます。聖書の教えを見るなら、私たちがどのように生きていくべきかを教えられます。主の前に正しく生きることは、決して無駄な選択、無駄な人生ではないことを教えられます。却って、主のために生きることがどれ程永遠の祝福をもたらすのかを、私たちは聖書を通して知っています。だから、そのように生きていこうとするのです。アブラハムは、モーセは、エリヤは、ダニエルは、エレミヤは、彼らはみな私たちに教えてくれるのです。主に従い続けていくことは決して無駄ではないと。彼らが声を一つにして我々に語り続け

るのです。「勇気を失ってはいけない、立ち止まってはいけない、歩み続けていきなさい、前に進んでいきなさい。」と。

だから、私たちは希望を持っているのです。「主がおっしゃったことは必ずそのようになる」と、そのような希望を持って私たちは今日生きることができるのです。このような素晴らしい先輩たちの生き様がその希望を私たちにくれるのです。だから、このように言えませんか？私たちの希望は「神がどのようなお方であるか」という事実に基づいていると。神がどんなに素晴らしいお方であるか、神がどれほど約束を守られる忠実なお方であるか、誠実なお方であるか、そのことを知れば知るほど私たちの希望は増していくのです。「心配しなくていい。神に任せておけばいい。心配しなくていい。この神がすべてをご存じだ。希望は神から来る。」と。

ダビデは詩篇62：5でこのように言います。「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。」と。素晴らしいと思いませんか？私の希望、私の望みは神から来ると。神を覚える時に私たちは希望を持って生きることができるのです。ヘブル人への手紙の著者は私たちにこのようにことを教えました。ヘブル6：10-12「神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。：11そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心さを示して、最後まで、私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれるように切望します。：12それは、あなたがたがなまけずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです。」と。著者はこのように言います。「神は約束を必ず守られる方だ。だから、どんなに小さなことでもあなたが主のために為すならば、神はそれを覚えていてくださる。そして、覚えるだけでなくそれにふさわしい報いを与えてくださる。」と。そこで彼は言います。「だから迫害されても、人から理解されなくても、人から嫌われたとしても、しっかりと希望を抱いて過ごしていきなさい。決して、怠けてはいけない。」と。どのような神なのかをもう一度覚える時に「怠けてはいけない」と言われるのです。

(1) **なまけないで**：怠ける人とは「みことばを学ぶけれども実践しない人」です。自分のことばかり考えて人々の成長のために働こうとしない人です。神から与えられた素晴らしい霊的な賜物を用いて奉仕しようとする人です。創造主なる神が与えてくださった責任を果たそうとしないのです。そのようなことがあってはいけないと言うのです。

(2) **信仰の勇者を見る**：思い出してみなさい、神がどのような方なのか？そして、あなたがたの信仰の先輩がどのように生きたのかです。ヘブル人への手紙の著者はこの後アブラハムの話をして行きます。6章13節からアブラハムへの約束のことが記されています。彼らも神の約束を信じて神に従った者たちです。そこでこのヘブル書の著者は言うのです。「しっかりと主を信じて主に従っていきなさい。主の約束を信じきる者として従っていきなさい。」と。ヘブル12：1にはこのように記されています。「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」と。「忍耐を持って走り続けていきなさい、ゴールはまだだ。立ち止まってはいけない。希望を持ってしっかりと走り続けていきなさい。」、神は約束されたことを必ず為さいます。そのことをしっかりと信じて主に従い続けていくことだと言うのです。

ルカの福音書の中で、エリサベツがこのように言っています。ルカ1：45「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」とマリヤに対して言ったのです。信仰者の皆さん、このような先輩たちがたくさんいたのです。神のおことばを信じ、信じきった人たちです。神が約束されたことは必ずそうなる信じ、そのように生きた者たちです。そして、神はあなたにチャレンジするのです。「そのように生きていきなさい！残された人生を！」と。私たちが聖書を学ぶときに、この聖書は私たちに忍耐を与えます。この聖書は私たちに励ましをくれます。そして、我々が希望を持って生きていく者として、この聖書は私たちに大きな力をもたらしてくれます。私たちはそのような信仰者として歩むのです。神を信じきった者として神に信頼をおいた者として。

3. パウロの祈り 5-6節

ここにはパウロの祈りがあります。すべてを見ることはできませんが、パウロが祈ったことは、このローマの教会が主にあって一つとなることです。なぜ、そのことを祈ったのでしょうか？パウロは私たちに教えてくれます。5-6節「どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいませように。：6それは、あなたがたが、心をつにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。」もし、教会が神にあって一つになっているなら、その教会が神にささげる賛美や礼拝を神は喜ばれるということです。ということは、もし、

教会が一つになっていなければ、その賛美もその礼拝も神はお喜びにならないと言っているのです。だから、私たちは自分を捨てているのです。自分を捨てていくのです。そして、神が何をお喜びなるのか、そのことをしっかり見て、そのことを実践して行くのです。私たちが主であって一つになる時に神の栄光が現わされると言うのです。でも、一つでなければ神の栄光は現わされないと。

信仰者の皆さん、だから、あなたの信仰が大切なのです。だから、あなたがどのように生きていくかが大切なのです。我々が知っているように、一つの罪がイスラエルに敗北をもたらしました。私たちが期待することは、ここにおられるすべての皆さんは祝福をもたらす人であって欲しいということです。一致をもたらす人であって欲しい、そのことです。その決心はあなたがすることであり、その決心はあなたが今できることです。そのような思いをもって、そのような決心をもって主に従い続けてくださることです。一つになるなら主の栄光が現わされると、そのことを私たちは心から願いますね！神の栄光が現わされて欲しい、私たちを救ってくださったこの方のすばらしさが明らかになって欲しい！そのためには一つになることです。

《考えましょう》

1. 霊的成長のために、みことばが必要なのはどうしてでしょう？
2. みことばを実践するためにはどうすればいいでしょう？
3. 「心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえること」がどうして重要なのでしょうか？
4. 「心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえる」ためには、個人として、また、群れとしてどうすればいいのでしょうか？